

琉球沖永良部語上平川方言の言語資料

山田真寛⁺・横山（徳永）晶子⁺⁺

⁺京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット

masahiro.yamada@gmail.com

⁺⁺一橋大学社会学研究科

akikoyokoyama1110@gmail.com

キーワード：琉球諸語、奄美、沖永良部、消滅危機言語、言語復興、表記法

1 はじめに



図1：沖永良部島、上平川集落の位置

本稿は沖永良部島の上平川集落（鹿児島県大島郡知名町字上平川）で話されている琉球諸語（以下「ひょーむに（çoo+muŋi “上平川+ことば”）」とする）の言語資料を提示する。言語資料はひょーむに母語話者（1957年生）の創作物語「みちやぬ ふい（土の

声）」の第一話全文を収録する。また言語資料を記録するための現代日本語共通語のひらがなをベースにした表記法（以下「ひらがな表記法」）を提案することも本稿を目的とし、ひらがな表記法を整備するための言語音の調査も報告する。

ひょーむにを含む琉球諸語・諸方言（地域言語）は、流暢な話者が概ね 60 歳以上であり、母語として獲得している子どもがいない、世代間継承が断絶した消滅危機言語である。各地域言語の言語体系を記述・記録する研究者の数・能力は限られており、これに依存するだけでは多くの地域言語が近い将来消滅してしまう。しかし、母語話者や地域住民が容易に使用することができ、かつ異なる言語音を一貫して書き分けられる表記法があれば、研究者による地域言語の記述が進んでいないうちから、母語話者や地域住民がある程度の言語記述を行うことができる。さらに母語話者や地域住民がこの表記法を用いることで、地域コミュニティの手で言語資料を大量に記録することも可能である（山田 2015）。UNESCO（2003）が提案する言語の消滅危機度測定では、表記法の有無と言語記録の質・量が危機の度合いに大きく影響し、消滅の危機にある言語が表記法を持つこと、質の高い言語資料を多く蓄積することが、消滅危機度が下がることを含意している。さらに、本稿で言語資料として提示するような消滅危機言語を用いた創作活動も、言語の消滅危機度を下げることによって大きく貢献する要素である。

本稿で提案するひらがな表記法は、著者が言語資料の作者とともに言語音・音素を短期間で特定しながら、小川（2015）が提案する琉球諸語のための統一的表記法を参照して作成した。記述の進んでいない琉球諸語の数は、長期間滞在してフィールド調査を行う研究者よりはるかに多く、本稿の手法が他の琉球諸語の初期調査およびひらがな表記法整備の際に、コミュニティと協働で言語の記述・記録を効率的に進めるガイドラインとなることが期待される。

1.1 先行研究

沖永良部語は、口蓋化の音変化（ki→tɕ）を経た東部方言と、音変化を経なかった西部方言に分かれることが知られている（真田・奥間 1986）。ひょーむには西部方言に属する。沖永良部語に関する最も包括的な先行研究は平山（1986）である。平山（1986）は、東部の和泊、国頭集落、西部の知名、瀬利覚集落の音韻、形態、統語論の一部を報告している。近年では Lubbe and Tokunaga（2015）が西部の正名集落、東部の国頭集落の文法概略を発表したほか、国立国語研究所が東部の出花、国頭集落、西部の瀬利覚、田皆集落における語彙、文法調査の結果を刊行する予定である。ひょーむにに特化して報告した先行研究は管見の限り存在しない。

2 言語音の特定

ひらがな表記法は、基本的に開音節を単位とした表記法であり、頭子音と音節核となる母音の組み合わせを一文字で表す。よって、地域言語が持つ言語音を母音と子音に分けて特定することが、表記法整備の初期段階として必要である。実在する開音節に対応する文

字が全て含まれるような文字セットを準備してひらがな表記法を作成する。つまり、その言語の音として特定した子音・母音が、実際に開音節の頭子音・音節核となるかどうかの調査は、ひらがな表記法作成時にはそれほど突き詰めず、論理的に可能な全ての組み合わせに該当する文字を用意し、言語記録が蓄積され、音韻論的記述が進むにつれて整理していく方針を採用する。

以下では、表層的に観察される母音と子音を特定する。使用するデータは全て、著者が2015年9月と12月に行った調査で、言語資料の作者である1957年生の母語話者から収集した。言語資料「みちやぬ ふい」の語彙173語¹と、その追調査と、横山が沖永良部島国頭集落で収集している調査データをもとにした調査で得た語彙150語²の計323語をデータとして用いる。

2.1 母音

ひょ一むには表1でまとめる五母音の短母音と長母音（母音の連続VVとして表記する）を持ち、表2、表3で示す対立が観察される。例えば表2において、[i]と[u]の対立は、最上段の[i]の行と右端の[u]の列が交差する欄に、**tiati** “手当”と**kutu** “こと”（t_#環境）として示されている。

表1：ひょ一むにの母音

	前	中	後
高	i, ii		u, uu
中	e, ee		o, oo
低		a, aa	

表2：短母音の（準）最少対

	i	e	a	o	u
i		sudi 袖 φude 筆	teimi 爪 ama 母	tiati 手当 tinto 空	tiati 手当 kutu こと
e			φude 筆 uda どこ	hate 畑 tinto 空	akuce 退屈 ueu 後ろ
a				ura あなた mihediro ありがとう	sata 砂糖 satu 里
o					tinto 空 kutu こと
u					

¹非自立語25語（助詞類20語、文末詞5語）、活用語48語を含む。異なる活用形も含めると213語。

²活用形・派生語も含めると159語。

表3 : 長母音の最少対

	i	e	a	o	u
i		jii 柄 jee 祝い	jii 柄 jaa 家	tii 手 too 蛸	jii 柄 juu 湯
e			çee 蠅 çaa 坂	hee 灰 hoo 水路	jee 祝い juu 湯
a				taa 田 too 蛸	jaa 家 juu 湯
o					too 蛸 tuu 十
u					

表4の語彙を用いて、各母音の第1フォルマント(縦軸)、第2フォルマント(横軸)を計測した。表4中で下線を引いたHトーンが実現する各母音を持つ語彙を3つずつ用意し、それぞれ3回ずつ母語話者が発音したものをそれぞれ計測した。その値を二次元に配置した母音空間図を図2に示す。各母音と音節を成す頭子音をそろえることはできなかったため、ばらつきが見られるが、五母音は音響的にもおおむね明瞭に区別されていると言える。

表4 : 母音空間図作成に用いた語彙(下線部が計測した母音)

i	e	a	o	u
miz <u>i</u> 水	hate <u>e</u> 畑	nama <u>a</u> 今	zo <u>o</u> 門	φut <u>u</u> çei 今年
nab <u>i</u> 鍋	akuce <u>e</u> 退屈	hagan <u>i</u> 鏡	samp <u>o</u> ウズラ	wud <u>u</u> i 踊り
tui <u>i</u> 鳥	aite <u>e</u> 相手	uda <u>a</u> どこ	ho <u>o</u> 水路	agu <u>u</u> 友だち

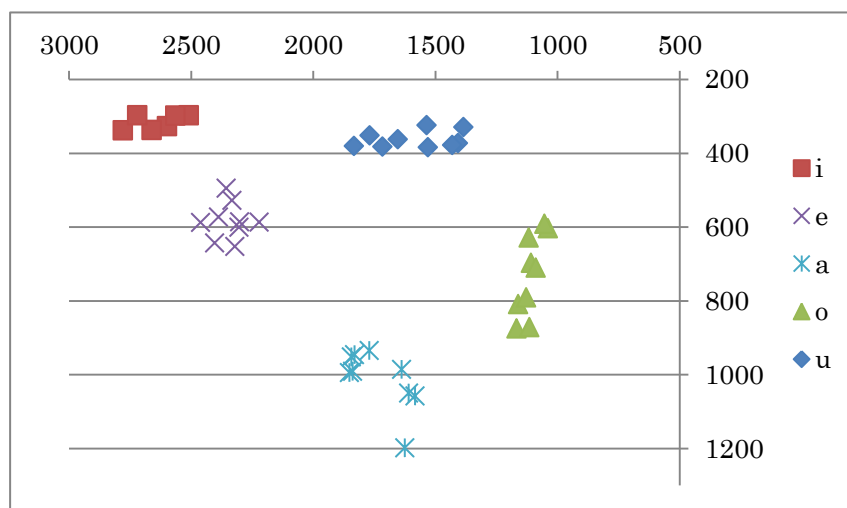


図2 : 母音空間図(縦軸:F1, 横軸:F2)

母音の長短は弁別的であると思われるが、これを示す最少対は観察されていない³。長母音を含む語例のみが観察され、その長母音が最小語制約およびメロディー制約⁴による長音化に由来せず、調査協力者が短母音との置き換えを「それはひょーむにの語彙ではない」と判断した語を以下に列挙する。不十分な証拠ではあるがこれらの語例にもとづき、ひょーむにには母音の長短が弁別的であると結論付ける。

- | | | | |
|----------|----|---------------------|-------------|
| (1) [ii] | a. | ciikusa | “カタバミ” |
| | b. | hooracagiisanu | “嬉しそうな” |
| (2) [ee] | a. | meenabi | “若い娘” |
| | b. | heepa | “二の腕” |
| | c. | teenee | “丁寧” |
| | d. | deezoobu | “大丈夫” |
| (3) [aa] | a. | maamii ⁵ | “豆” |
| | b. | baaba | “おばあさん” |
| | c. | n'aatca | “明日” |
| | d. | taaueagi | “ツンとすました様子” |
| (4) [uu] | a. | muuru | “みんな” |
| | b. | euuki | “ごちそう” |
| (5) [oo] | a. | hooracan | “嬉しい” |
| | b. | deezoobu | “大丈夫” |

2.2 子音

表5にひょーむにで観察される子音の表層形をまとめる。

³ 語末では母音の長短の対立がなく、長く実現するものは、メロディー制約（注4参照）または最少語制約（自立語は2モーラ以上）を満たすためのものと考えられる。

⁴ 本稿では議論しないが、語彙的メロディー指定が HHLH である語彙が、3モーラ以下の音韻語（自立語（+付属語））の場合に、一部のモーラが長音化することが観察されている（例：uzu]ru=[mu “野菜＝も” vs. uzu]u]ru “野菜”、a[b は a から b にかけてのピッチの上昇を、a]b は a から b にかけてのピッチの下降を表す（[と]の標識は上野（2006）による）。

⁵ 語末の ii はメロディー制約によって長音化した母音。属格標識=nu が付くと maami=nu となる。

表5：ひょーむにの子音（表層形）

調音方法		調音点		両唇音	歯茎音	(歯茎) 硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂/ 声門音
		無声	有声					
破裂音	無声			p	t, ts	tɕ	k	q
	有声			b	d		g	
摩擦音	無声			ɸ	s	ɕ, ç		h
	有声				z	z		
鼻音	非喉頭化			m	n	ɲ	ŋ	ɴ
	喉頭化			m'	n'	ɲ'		
弾き音					r			
接近音	非喉頭化			w		j		
	喉頭化			w'		j'		

[p], [z], [ts]は、分布がオノマトペか借用語に限られるようである。以下にこれまで得られた語例をあげる。

- (6) [p] a. sampo “ウズラ”⁶
 b. pateipatei “パチパチ”（擬音語）
- (7) [ts] a. kutsu “靴”
 b. aisatsu “あいさつ”
- (8) [z] a. hanzaci “人が集まるときなどに縁側を庭に延長したもの”
 b. urizummaami “うりずん豆（シカクマメ）”
 c. zubora “怠けること”

半母音[w], [j]と鼻音 [m], [n]に、喉頭化(C')・非喉頭化(C)の対立があり、以下の（準）最少対が存在する。ひょーむにの喉頭化子音は、例えば[m']は、子音の開始点までは声門を閉鎖して空気圧を高め、両唇の開放と同時に声門閉鎖を開放する調音方法で構音される。

- (9) a. wanu “私” b. w'aa “豚”
 (10) a. juu “湯” b. j'uu “魚”
 (11) a. maa “ここ” b. m'aa “そこ”
 (12) a. naa “名前” b. n'aa “もう、もっと”

⁶ sampo は沖永良部 4 地点で確認されており（国立国語研究所調査による）沖永良部語の中では定着している語彙だと思われるが、与論語、沖縄諸語には存在せず語源は不明。

3 ひらがな表記法

ひょ一むには以下で示す音節構造を許す。音節核となる母音以外は全て非義務的である。この音節構造を拍音とし、ひょ一むにで許されている拍音の表記法を作成する。

(13) (C)(G)V(V)(N) C: 子音、V: 母音、G: 半母音、N: 鼻音

琉球諸語統一的表記法（小川 2015）にもとづいた、ひょ一むにのひらがな表記法を、発音表記、語例とともに表 6 に示す。この表記法は、現代日本語共通語のひらがなに補助記号を加え、以下の形式に沿って琉球諸語の全拍音を表記できるよう設計されている。

(14) 【補助記号】 【主仮名（大文字）】 【補助仮名（小文字）】 【補助記号】

小川（2015）では主仮名の前に 4 つの補助記号が使われているが、ひょ一むにでは喉頭化音を表す「´」（「ちよん」と呼ぶ）のみを使用する（例「´ま」[m'a]）。また仮名文字の後に続く補助記号は、ひょ一むにでは「い」に続く「`」（「てんてん」と呼ぶ）のみを使用する⁷。喉頭化音の他に現代日本語共通語に無い拍音には、[ji], [j'i], [wu], [w'u]があり、それぞれ「い」「い´」「をう」「をう´」を使用する。

(15) a. 「いー」 [ii] “胃” b. 「い´ー」 [jii] “柄”
 (16) a. 「うとう」 [utu] “音” b. 「をうとう」 [wutu] “夫”

表 6 では、横方向に母音を、縦方向に子音（子音と半母音の組み合わせを含む）を取り、それぞれの組合せを拍音として、各セルで表記を提示する。語例は概ね言語資料内の語彙を例示したが、言語資料に該当する語が無い場合は、調査データから補足した語を用いている。灰色の欄は使用語例が観察されていない拍音を表しており、ひょ一むにに存在しない拍音というわけではない。小川（2015）で表記が設定されていないものは、ひょ一むにで観察される「ひえ」をのぞき本稿でも表記を提案せず、同様にセルを灰色にしている。

Cje に関しては小川（2015）で報告されている「しえ」[ɕe]と「じえ」[ze]に加えて、ひょ一むにでは[ɕe]が観察され、これに「ひえ」を新たに提案する。また、[ɕ], [z], [tɕ], [ç], [ɲ] は、破裂音と同様に[s], [z], [ts], [h], [n]に半母音[j]が続いたもの（[sj], [zj], [tsj], [ɲj]）の表層形とする分析が可能である。Cje は未観察のものが多いが、語例が観察された場合はこの分析を仮定して以下の方針にもとづき、新たな表記法を用意する。

⁷ 小川（2015）は、現代日本語共通語で濁点および半濁点が付く仮名文字（「ば」「ぱ」など）を、主仮名として扱っている。

(17) Cje に関する方針

- i) 基本的には（基底形で）半母音[j]無しの拍音と同じ子音を持つ Ci を表す主仮名に、小文字の「え」を補助記号として付す（例：「き」＋「え」＝「きえ」）。
- ii) Ci を表す主仮名に小文字の「い」を補助記号として用いる「てい」「でい」「つい」「ふい」は、これらの主仮名に小文字の「え」を付し、「てえ」「でえ」「つえ」「ふえ」とする。

Cw は現時点では「くわ」[kwa]のみが観察されているが、沖永良部語国頭方言では「ぐわ」[gwa]も観察されている（例：magwa “孫”）。表の体裁の都合上「くわ」のみを最後に提示したが、新たに観察された場合は以下の方針にもとづき表記法を作成することとする（小川（2015）と同じ方針）。

(18) Cwa に関する方針

- i) 基本的に Cwa を表すには、子音を同じくする Cu の主仮名に、小文字の「わ」を補助記号として付す。
- ii) Cu に小文字の「う」を補助仮名として用いる「とう」「どう」は、これらの主仮名に小文字の「わ」を付し、「とわ」「どわ」とする。

軟口蓋よりもかなり奥に舌背（後舌面）を接触させて作られる（口蓋垂）無声破裂音[q]は、語頭位置かつ[o]の前にのみ現れ、語頭位置では[o]の前には軟口蓋無声破裂音[k]は現れない（[k]は他の全ての母音の前に現れる）。よって(19)の音韻規則を仮定し、表 6 では[qo]を子音[k]の行に含める。

- (19) a. qoi “肥やし”
- b. qoi “鋤”
- c. k → q / word[_o

表6：ひょーむにのひらがな表記法と語例

	a	i	u	e	o
∅	あ a あぐ agu 友だち	い i いち itei いつ	う u うじゆる uzuru 野菜	え e	お o おー oo 泡、粟
k	か ka かみゆん kamjun 食べる	き ki きー kii 気	く ku くさ kusa 草	け ke けーたん keetan かけた	こ ko(→qo) こい qoi 鋤、肥やし

kj	きや kja	kji	きゅ kju	kje	きよ kjo
	わきや wakja 私たち		きゅーしが kjuueiga 来るが		
g	が ga	ぎ gi	ぐ gu	げ ge	ご go
	がん gan そう	ぎーさぬ giisanu ～そうな	しぐとう eigutu 仕事	じょーきげん zookigen 上機嫌	ごくらく gokuraku 極楽
gj	ぎや gja	gji	ぎゅ gju	gje	ぎよ gjo
	ぎゃー gjaa カヤ (植物)				
s	さ sa	すい si	す su	せ se	そ so
	さいご saigo 最後		すば suba そば (傍、側)		そー soo 竿
e	しゃ ea	し ei	しゅ eu	しえ ee	しよ eo
	しゃー caa 下、舌	しー eii 縁 (へり)	しゅーき euuki ごちそう	あくしえ akuce 退屈	
z	ざ za	ずい zi	ず zu	ぜ ze	ぞ zo
	はんざし hanzaei 座敷を庭に延 長したもの		うりずんまーみ urizummaami うりずん豆		
z	じゃ za	じ zi	じゅ zu	じえ ze	じよ zo
	じゃま zama 邪魔	いじ izi 行き	うじゅる uzuru 野菜	なーじえ naaze 無いか	にじよさい nizosai かわいそうに
t	た ta	てい ti	とう tu	て te	と to
	たーうしゃぎ taaueagi すました様子	ていだ tida 太陽	とうびやがたん tubjagatan 飛び散った	はて hate 畑	とー too 蛸
tj	てや tja	tji	てゅ tju	tje	てよ tjo
d	だ da	でい di	どう du	で de	ど do
	うだ uda どこ	まんでい mandi たくさん	むどうたん mudutan 戻った	でーじょーぶ deezoobu 大丈夫	=どー =doo =よ
dj	でや dja	dji	でゅ dju	dje	でよ djo
	=でや =dja =のだ				=でよ =djo =だよ

ts	つあ tsa	つい tsi	つ tsu	つえ tse	つお tso
			あいさつ aisatsu あいさつ		
te	ちや tea	ち tei	ちゅ teu	ちえ tee	ちよ teo
	みちや mitea 土	ちら teira 顔	ちゅー teuu 人		ちよーねー teoonee 少し
n	な na	ni	ぬ nu	ね ne	の no
	なま nama 今		ぬー nuu 何	ねま nema 寝床	のーぎー noogii のこぎり
ɲ	にや ɲa	に ɲi	にゅ ɲu	にえ ɲe	によ ɲo
	しらにや ɲiraɲa しないと	にじよさい ɲizosai かわいそうに			
n'	'な n'a	n'i	'ぬ n'u	'ね n'e	'の n'o
	'なーちや n'aateɲa 明日			'ねー n'ee 少し	
ɲ'	'にや ɲ'a	'に ɲ'i	'にゅ ɲ'u	'にえ ɲ'e	'によ ɲ'o
	'にやーとらん ɲ'aatun 玉城(集落名)				
h	は ha	hi	ほう hu	へ he	ほ ho
	はぎ hagi 足			へーさ heesa 早く	ほー hoo 肌
ç	ひゃ ça	ひ çi	ひゅ çu	ひえ çe	ひよ ço
	ひゃー çaa 坂	ひんび çimbi 毎日	ひゅー çuu 今日	ひえー çee 蠅	ひよー çoo 上平川 (集落名)
ɸ	ふわ ɸa	ふい ɸi	ふɸu	ふえ ɸe	ふお ɸo
	ふあー ɸaa 葉		ふい ɸui 声		
ɸj	ふゃ ɸja	ɸji	ふゅ ɸju	ɸje	ふよ ɸj
p	ぱ pa	ぴ pi	ぷ pu	ぺ pe	ぽ po
	パチーパチ ⁸ pateipatei パチパチ				さんぽ sampo ウズラ

⁸ オノマトペはカタカナで表記する。

pj	ぴや pja	pji	ぴゅ pju	pje	ぴよ pjo
b	ば ba すば suba そば (傍,側)	び bi ひんび çimbi 毎日	ぶ bu ちぶる teiburu 頭	べ be =んたべ =ntabe =まで	ぼ bo
bj	びや bja びゃー bjaa ニラ	bji	びゅ bju	bje	びよ bjo
m	ま ma まんでい mandi たくさん	み mi みー mii 実	む mu むーる muuru みんな	め me めー mee 前	も mo もーきゅん mookijun 儲ける
mj	みや mja きちみゃー kiteimjaa 聞いてみよう	mji	みゅ mju たるみゅん tarumjun 頼む	mje	みよ mjo
m'	'ま m'a 'まー m'aa そこ	'み m'i	'む m'u 'むいのこし m'uinokoci 思い残し	'め m'e	'も m'o 'もーり m'oori ようこそ
m'j	'みや m'ja 'みゃー m'jaa 猫	m'ji	'みゅ m'ju 'みゅん m'jun 思うこと	'みえ m'je	'みよ m'jo
j	や ja やわらたまー ぬ jawaratamaanu 柔らかい	い` ji い`る jiru 夜	ゆ ju ゆくわ jukwa 良い	いえ je いえー jee 祝い	よ jo よー joo そっと、じっと
j'	'や j'a	'い` j'i	'ゆ` j'u 'ゆー j'uu 魚	'いえ j'e	'よ` j'o 'よー j'oo ほら穴
r	ら ra ちら teira 顔	り ri ふり φuri これ	る ru たる taru 誰	れ re	ろ ro みへでいろ mihediro ありがとう
rj	りや rja なりや narja なれば	rji	りゅ rju	rje	りよ rjo

w	わ wa わぬ wanu 私	うい wi	をう wu をうらどうたし wuradutaei 叫んでいたの	うえ we	うお wo
w'	'わ w'a 'わー w'aa 豚	'うい w'i	'う w'u	'うえ w'e	'うお w'o
etc.	くわ kwa くわんきや kwaŋkja 子どもたち	ん m~n~ŋ~N いんが jinga 男	ーVV むーる muuru みんな	っ CC	

4 言語資料

ひょーむに母語話者（1957年生）による創作物語「みちやぬ ふい（土の 声）」全文を言語資料として提示する。接語（付属語）境界を「=」、複合語境界を「+」で表示し、(20)で例示する五段の記述方法を用いる。1行目のひょーむに文と2行目の日本語文は、意訳や分かち書きも含め、絵本（松村ほか 2016）として出版した原文のままとする。ただし原文では登場人物の台詞を太字で表しているが、本稿では「」で表記する。

(20)	みちやぬ	ふい	←原文（ひょーむにひらがな表記）
	土の	声	←原文（日本語）
	みちや=ぬ	ふい	←分析形（ひらがな表記）
	mitea=nu	ɸui	←分析形（表層形発音記号）
	土=の	声	←語釈

物語要約

畑の野菜たちに御用聞きに行ったゆきぐわー（ゆきちゃん）は、種を残そうとする雑草のカタバミの願いを聞き入れ、引き抜くのを一日待つことにする。帰り際、日照り続きで苦しんでいた土の声を聞き、土の手入れをして帰る。翌日カタバミを引き抜きに行くと…。

- [1] あくしえ しゅんどー
たいくつだなあ
あくしえ しゅん=どー
akuce eun=doo
退屈 する=よ

- [2] ひゅーわ ぬーむ しゅーぬ くとぅ なん
 きょうは なにも することがない
 ひゅー=わ ぬー=む しゅーぬ くとぅ なん
 ɕuu=wa nuu=mu euunu kutu nan
 今日=は 何=も する こと ない
- [3] はてち いじ ぬーか しゅーぬ くとぅ なんか きちみゃー
 はたけに いって なにか おてつだいすることが ないか きいてみよう
 はて=ち いじ ぬー=か しゅーぬ くとぅ なん=か きち みゃー
 hate=tei izi nuu=ka euunu kutu nan=ka kitei mjaa
 畑=に 行って 何=か する こと ない=か 聞いてみよう
- [4] うじゅるち ふい けーたん
 やさいに こえを かけた
 うじゅる=ち ふい けーたん
 uzuru=tei ɸui keetan
 野菜=に 声 かけた
- [5] 「むーる ぬーか しゅーぬ くとぅ なーじえ」
 「こんにちは なにか おてつだい しましょうか」
 むーる ぬー=か しゅーぬ くとぅ なーじえ
 muuru nuu=ka euunu kutu naaze
 みんな 何=か する こと ないか
- [6] たーうしゃぎ しー たるむ ひんと しらん
 ツンとすまして だれも へんじをしてくれない
 たーうしゃぎ しー たる=む ひんと しらん
 taaueagi eii taru=mu ɕinto eiran
 ツンとすました様子 して 誰=も 返答 しない
- [7] はてぬ しーぬ はなちむ ふい けーたん
 はたけのまわりの はなにも こえをかけた
 はて=ぬ しー=ぬ はな=ち=む ふい けーたん
 hate=nu eii=nu hana=tei=mu ɸui keetan
 畑=の 縁=の 花=に=も 声 かけた
- [8] 「ひゅーわ まーにおーとぅん」
 「きょうは まにあってまーす。」
 ひゅー=わ まーにおーとぅん
 ɕuu=wa maaniootun
 今日=は 間に合っている

- [9] むーる ほーらしゃぎーさぬ ちらし ひんと しー くりたん
 みんな ニコニコしながら こたえてくれた
 むーる ほーらしゃ ギーさぬ ちら=し ひんと しー くりたん
 muuru hooraea giisanu teira=ei çinto eii kuritan
 みんな 嬉しい そうな 顔=で 返答 して くれた
- [10] くさちむ はなし しー みちちゃん
 くさにも はなしかけてみた
 くさ=ち=む はなし しー みちちゃん
 kusa=tei=mu hanaci eii mitcan
 草=に=も 話 して みた
- [11] 「どーか ‘なー ‘ねー ふぬ まま よー しみてい くりり」
 「おねがいだから もう すこし このまま そっと しておいて くれよ」
 どーか ‘なー ‘ねー ふぬ まま よー しみてい くりり
 dooka n'aa n'ee funu mama joo eimiti kuriri
 どうか もう 少し この まま そっと させて くれ
- [12] 「なまがでい しにぶしゃなん」
 「まだ しにたくないよ」
 なま=がでい しに+ぶしゃ なん
 nama=gadi eiji+buca nan
 まだ 死にたくない
- [13] なま さいごぬ はな さかさんでい しゅーぬ とくるとでや
 「いま さいごの はなを さかそうと しているところなんだ」
 なま さいご=ぬ はな さかさん=でい しゅーぬ とくると=でや
 nama saigo=nu hana sakasan=di euunu tukuru=dja
 今 最後=の 花 咲かそう=と する ところ=だ
- [14] なーちゃんたべ まちくりり
 「あしたまで まってくれよ」
 ‘なーちゃ=んたべ まち くりり
 n'aatea=ntabe matei kuriri
 明日=まで 待って くれ
- [15] 「わかたん わかたん」ち ちぶる なーでいたんきや
 「わかった わかった」と あたまを なでると
 わかたん わかたん=ち ちぶる なーでいたん=きや
 wakatan wakatan=tei teiburu naaditan=kja
 わかった わかった=と 頭 なでた=なら

- [16] パチーパチ シーくさぬ みーぬ とぅびやがたん
 パチパチ カタバミのみが げんきよく はじけとんだ
 パチーパチ シーくさ=ぬ みー=ぬ とぅびやがたん
 pateiipatei eiikusa=nu mii=nu tubjagatan
 パチパチ カタバミ=の 実=が 飛びちった
- [17] しぐとうしまちやぬ はなぬ わかりぬ あいさつぬ きかたん
 おしごとを すませた はなたちの さよならの あいさつが きこえた
 しぐとう しまちやぬ はな=ぬ わかり=ぬ あいさつ=ぬ きかたん
 eigutu eimatecanu hana=nu wakari=nu aisatsu=nu kikatan
 仕事 済ませた 花=の 別れ=の あいさつ=が 聞こえた
- [18] 「ひゅーわ たるむ あいて シー くりらじえ」
 「きょうは だれも あいて して くないのか」
 ひゅー=わ たる=む あいて シー くりらじえ
 çuu=wa taru=mu aite eii kuriraze
 今日=は 誰=も 相手 して くないか
- [19] 「みじらしゃなんやー」
 「つまらないの…」
 みじらしゃ なん=やー
 miziraea nan=jaa
 おもしろい ない=な
- [20] むどうらんでい しゃんきや うだかんでい あびゆぬ ふいぬ しゃん
 かえろうと すると どこかで よびとめる こえが した
 むどうらん=でい しゃん=きや うだ=か=んでい あびゆぬ ふい=ぬ しゃん
 muduran=di eaŋ=kja uda=ka=nti abijunu φui=nu eaŋ
 戻ろう=と したら どこ=か=で 呼ぶ 声=が した
- [21] うしゅ むこたしが うじゅるむ はなむ くさむ あていなぬ ほんかどう しゅーる
 ふりかえるが やさいも はなも くさも しらんぷりだ
 うしゅ むこた=しがうじゅる=む はな=む くさ=む あていなぬ ほんか=どうしゅーる
 ueu mukota=eiga uzuru=mu hana=mu kusa=mu atinanu honka=du euuru
 後ろ 向いた=が 野菜=も 花=も 草=も 知らない ふり=ぞ⁹ している
- [22] よー しゅーてい きー ちきてい きちみちやん
 じっと みみを すまして きいてみた
 よー しゅーてい きー ちきてい きち みちやん
 joo euuti kii teikiti kitei mitcan
 じっと して 気 つけて 聴いて みた

⁹ いわゆる焦点助詞=du の語釈は「これぞまさに」などの「=ぞ」とする。

[23] がん しゃんきや はぎぬ すばんてい ふいぬ しゃん

すると あしもとで こえがした

がん しゃんきや はぎ=ぬ すば=んてい ふい=ぬ しゃん

gan ɕaŋkja hagi=nu suba=nti ɸui=nu ɕan

そう したら 足=の そば=で 声=が した

[24] 「わぬでや わぬでや へーさ きー ちち くりりでや」

「わたしよ わたしよ はやく きづいてちょうだい」

わぬ=でや わぬ=でや へーさ きー ちち くりり=でや

wanu=dja wanu=dja heesa kii teitei kuriri=dja

私=だ 私=だ 早く 気 付いてくれ=だ

[25] わが がんし だりちきとうし わからじえ

「わたしが こんなに つかれきっているのが わからないの」

わ=が がんし だり+ちきとう=し わからじえ

wa=ga ganci dari+teikitu=ei wakaraze

私=が こんなに 疲れ=きっている=の わからないか

[26] しんがり ふいし をうらどうたしわ みちや やたん

しわがれごえで さけんでは つちだった

しんがり ふい=し をうらどうた=し=わ みちや やたん

ɕingari ɸui=ei wuraduta=ei=wa mitea jatan

しわがれ 声=で 叫んでいた=の=は 土 だった

[27] 「あべー うらどう やていな あべあべー がんしむ だりちきてい」

「あら あなただったの あらあら こんなに やつれてしまつて…」

あべー うら=どう やていな あべあべー がんし=む だり+ちきてい

abee ura=du jatina abeabee ganci=mu dari+teikiti

あらー あなた=ぞだったか あらあら こんなに=も 疲れ+きつて

[28] 「ひんび ていだぬ ていーちきとうんとう ほーぬ ありたさやー」

「まいにち カンカンでりだから おはだが あれたのね」

ひんび ていだ=ぬ ていー+ちきとうんとう ほー=ぬ ありたさ=やー

ɕimbi tida=nu tii+teikituntu hoo=nu aritasa=jaa

毎日 太陽=が 照り+つけているから 肌=が 荒れた=ね

[29] 「にじょさい… しまだな あたんやー」

「かわいそうに… ごめんなさいね」

にじょさい しまだな あたん=やー

nizosai ɕimadana atan=jaa

かわいそうに すまないで あつた=ね

[30] 「きー ちかだな あたんどー」

「きがつかなかったわ」

きー ちかだな あたん=どー

kii teikadana atan=doo

気 付かないで あった=よ

[31] 「すぐ ほーぬ ていあて しらにや ならん」

「すぐ おはだの おていれを しなきゃ」

すぐ ほー=ぬ ていあてい しらにや ならん

sugu hoo=nu tiati eirapa naran

すぐ 肌=の 手当て しないと ならない

[32] 「さーさ ほー むまー」

「さあ マッサージを はじめましょう」

さーさ ほー むまー

saasa hoo mumaa

さあ 肌 揉もう

[33] てーねーに みちやむみ ちじきたん

ていねいに つちの マッサージを つづけた

てーねー=に みちや+むみ ちじきたん

teenee=ni mitca+mumi teizikitan

丁寧=に 土+揉み 続けた

[34] がん しゃんきゃ フクフク やわらたまーぬ ほー なたん

すると やわらかい おはだに なった

がん しゃん=きゃ フクフク やわらたまーぬ ほー なたん

gan ean=kja φukuφuku jawaratamaanu hoo natan

そう した=なら フクフク 柔らかい 肌 なった

[35] みちやわ ほーらしゃぎーさぬ ちら なてい ふいにむ はりぬ むどうたん

つちは ニコニコした かおに なり こえにも げんきが もどった

みちや=わ ほーらしゃ ぎーさぬ ちら なてい ふい=に=む はり=ぬ むどうたん

mitea=wa hooraea giisanu teira nati φui=ni=mu hari=nu mudutan

土=は 嬉しい そうな 顔 なって 声=に=も 張り=が 戻った

[36] 「あー ごくらくどー」

「あー きもちいいわー」

あー ごくらく=どー

aa gokuraku=doo

あー 極楽=よ

[37] 「いきういぬ いじてい きちやんどー」

「いきかえったわー」

いきうい=ぬ いじてい きちやん=どー

ikiui=nu iziti kitean=doo

勢い=が 出て 来た=よ

[38] 「ふりし また ちゃんとう しぐとう しらゆんわー」

「これで また ちゃんとおしごとが できるわ」

ふり=し また ちゃんとう しぐとう しらゆん=わー

φuri=ei mata teantu eigutu eirajun=waa

これ=で また ちゃんと 仕事 できる=わ

[39] うぬ いる うーあみぬ ふたん

その よる おおあめが ふった

うぬ いる うー+あみ=ぬ ふたん

unu jiru uu+ami=nu φutan

その 夜 大雨=が 降った

[40] ちぎぬ あさ むーるち あいさつ しんぎや いじゃんきや

つぎの あさ みんなに あいさつを しに いったら

ちぎ=ぬ あさ むーる=ち あいさつ し=んぎや いじゃん=きや

teigi=nu asa muuru=tei aisatsu ei=ngja izan=kja

次=の 朝 みんな=に あいさつ し=に 行く=と

[41] うじゆるむ はなむ くさむ じょーきげんぬ ちら しゅーたん

やさいも はなも くさも きもちよさそうな かおを していた

うじゆる=む はな=む くさ=む じょーきげん=ぬ ちら しゅーたん

uzuru=mu hana=mu kusa=mu zookigen=nu teira euutan

野菜=も 花=も 草=も 上機嫌=の 顔 していた

[42] しーくさぬ すばち いじゃん

カタバミの そばにいった

しーくさ=ぬ すば=ち いじゃん

eiikusa=nu suba=tei izan

カタバミ=の そば=に 行った

[43] 「わー しぐとうわ しだんどー」

「ぼくの しごとは おわったよ」

わー しぐとう=わ しだん=どー

waa eigutu=wa eidan=doo

私 仕事=は 済んだ=よ

- [44] 「なー ぬーむ ‘むいぬこしわ なんどー」
 「もう なにも おもいのこすことは ないな」
 ‘なー ぬー=む ‘むいぬこし=わ なん=どー
 n'aa nuu=mu m'uinukoci=wa nan=doo
 もう 何=も 思い残し=は ない=よ
- [45] 「いちんたべむ むーるが じゃま なゆんきや いかんとう たるまー」
 「いつまでも みんなの じゃまに なったら いけないから たのむよ」
 いち=んたべ=む むーる=が じゃま なゆん=きや いかん=とう たるまー
 itei=ntabe=mu muuru=ga zama najun=kja ikan=tu tarumaa
 いつ=まで=も みんな=の 邪魔 なる=と いけない=から 頼もう
- [46] 「うぬうち わー くわんきやが じゃま しんぎや きゅーしが たるみゆんど」
 「そのうち ぼくの こどもたちが じゃましに くるだろうが なかよくしてくれよ」
 うぬ うち わー くわ=んきや=が じゃま し=んぎや きゅー=しが たるみゆん=ど
 unu utei waa kwa=ŋkja=ga zama ei=ŋgja kjuu=eiga tarumjun=do
 その うち 私 子ども=たちが 邪魔 し=に 来る=が 頼む=よ
- [47] はら きみたぬ いんがぬ ふいぬ しゃん
 かくごを きめた おとこの こえがした
 はら きみたぬ いんが=ぬ ふい=ぬ しゃん
 hara kimitanu jinga=nu ŋui=nu ean
 腹 決めた 男=の 声=が した
- [48] しーくさ はがいぬじゃんきや うりずんまーみぬ ちら いじゃちゃん
 カタバミを ひきぬいたら うりずんまめが かおを だした
 しーくさ はがい+ぬじゃん=きや うりずんまーみ=ぬ ちら いじゃちゃん
 eiikusa hagai+nuzan=kja urizunmaami=nu teira izatean
 カタバミ 引き+抜いた=なら うりずん豆=が 顔 出した
- [49] 「みへでいろどー ふりし よーやく わきやちむ ていだぬ あたゆんどー」
 「ありがとう これで ようやく ぼくたちにも おひさまが あたるよ」
 みへでいろ=どー ふり=し よーやく わきや=ち=む ていだ=ぬ あたゆん=どー
 mihediro=doo ŋuri=eī joojaku wakja=tei=mu tida=nu atajun=doo
 ありがとう=よ これ=で ようやく 私たち=に=も 太陽=が 当たる=よ
- [50] 「なまから きばてい あき なりや まんでい みー ちきゆんどー」
 「これから がんばって あきになつたら いっぱい みを つけるぞ」
 なま=から きばてい あき なりや まんでい みー ちきゆん=どー
 nama=kara kibati aki narja mandi mii teikijun=doo
 今=から がんばって秋 なれば たくさん 実 付ける=よ

[51] 「‘なー わきや くとわ しゅわ しーぐりなんどー」

「もう ぼくたちの ことは しんぱいしないでいいよ」

‘なー わきや くと=わ しゅわ しーぐりなん=どー

n'aa wakja kutu=wa euwa eii + gurinan=doo

もう 私たち こと=は 心配 し+なくていい=よ

[52] 「わきや しゅーきわ ていだどう やんとう ‘なー でーじょーぶどや」

「ぼくたちの ごちそうは おひさまだから もう だいじょうぶだよ」

わきや しゅーき=わ ていだ=どう やん=とう ‘なー でーじょーぶ=どや

wakja ejuuki=wa tida=du jan=tu n'aa deezoobu=doja

私たち ごちそう=は 太陽=ぞ だ=から もう 大丈夫=だよ

[53] 「うぬうちに しーくさぬ くわんきやが じゃま しんぎや きゅーぬ はじ やしが」

「そのうち カタバミの こどもたちが じゃまに くるだろうが」

うぬ うち=に しーくさ=ぬ くわ=んきや=が じゃま しん=ぎや きゅーぬ はじ や=しが

unu utei=ni eiikusa=nu kwa=ηkja=ga zama eiη=gja kjuunu hazi ja=eiga

その うち=に カタバミ=の 子ども=たち=が 邪魔 し=に 来る はず だ=が

[54] 「うぬ くるにわ ‘なーひ ふでいとうんとう」

「そのころには ぼくたちは もっと おおきくなっているから」

うぬ くる=に=わ ‘なーひ ふでいとうん=とう

unu kuru=ni=wa n'aaçi φuditun=tu

その 頃=に=は もっと 育っている=から

[55] 「うぬ くわんきやとうむ ゆくわあぐ しー いかゆも」

「そのこたちとも なかよくやっっていけるさ」

うぬ くわ=んきや=とう=む ゆくわ あぐ しー いかゆ=も

unu kwa=ηka=tu=mu jukwa agu eii ikaju=mo

その 子ども=たち=と=も 良い 友だち して行ける=よ

[56] しぐとう しまちゃぬ しーくさわ ゆりぬはかに うちゃん

おしごとを すませた カタバミは ゆりのはかに おいた

しぐとう しまちゃぬ しーくさ=わ ゆり=ぬ はか=に うちゃん

eigutu eimateanu eiikusa=wa juri=nu haka=ni utean

仕事 済ませた カタバミ=は ユリ=の 墓=に 置いた

[57] ‘まーわ はなぬ みちやち むどうゆぬ ねまどう やーる

そこは くさや はなが つちに かえる ねどこだ

‘まー=わ はな=ぬ みちや=ち むどうゆぬ ねま=どう やーる

m'aa=wa hana=nu mitca=tei mudujunu nema=du jaaru

そこ=は 花=が 土=に 戻る 寝床=ぞ だ

参考文献

- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130. 1-42.
- 小川晋史 (2015) 『琉球のことばの書き方』東京：くろしお出版.
- 真田信治・奥間透 (1986) 「沖永良部島における口蓋化音の分布域」『琉球の方言』8. 法政大学沖縄言語研究所.
- 平山輝男 (1986) 『奄美方言基礎語彙の研究』.角川書店.
- 松村雪枝・山田真寛・横山 (徳永) 晶子・元木環・浅川友里江 (2016) 『みちやぬ ふい』ていんがまシリーズ1 みちやぬ ふい. 京都：言語復興の港.
- 山田真寛 (2015) 「島民による琉球与那国語の自然談話資料蓄積プロジェクト」『日本方言研究会第100回大会発表原稿集』甲南大学.
- UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages. (2003) “Language Vitality and Endangerment.” <http://www.unesco.org/new/en/culture/themes/endangered-languages/language-vitality/> (最終アクセス日 2016年2月28日)
- van der Lubbe, Gijs and Akiko Tokunaga. (2015) “Okinoerabu grammar.” In Heinrich, Patrick, Shimoji, Michinori and Shinsho Miyara(eds.) Handbook of Ryukyuan Languages. Berlin: De Gruyter Mouton.